花妖

内美

川端康成

花筐　はながたみ　加藤建亜小品集

昭和五十年六月十五日　初版印刷
昭和五十年六月二十六日　初版発行

一三〇〇円

著者　加藤建亜（かとうけんあ）
〒三四六
久喜市北青柳四二六

発行者　石澤三郎

発行所　㈱栄光出版社
東京都品川区東品川一-三七-五
電話（四七一）一二三五（代）
出版社コード〇六〇八

印刷　㈲江戸川印刷所
製本　㈲金秀社

©加藤建亜　1975

0093—7509—0608

花道

はながたみ

加藤建亜小品集

栄光出版社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

花筐（はながたみ）

目次

壺(つぼ) 7
あすの別れ 23
歯を拾う 51
苔寺暮色 67
宗達(そうたつ)パリへ飛ぶ 91
有(う)為(い) 117
納言拾筆(なごんしゅうひつ) 131
花散里(はなちるさと) 145
刀 185
三つのお墓 193
はつゆき 199

忘れ扇　209
釉（ゆう）　233

題字　大塚夕邨
装画　木島邦彦
構成　三木辰夫

壺(つぼ)

第三十五回文學界新人賞予選通過

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

会社の佐伯に、涼子から電話があった。
四時を過ぎていた。
「お会いしたいんです。そのまま会社にいてくれはったら、うちお伺いします」
涼子の若い声が、要件だけをたたみかけてきた。
「会社で、いいんですか」
と、佐伯はやさしく言った。
「ええ。お手間をとらせとうありませんよって」
「そんなこと。——ぼくならかまいません。外にしましょう」
「よろしおすやろうか」
遠慮しているふうな涼子の仕種が、声になって伝わってきそうだった。
佐伯は、
「どうぞ。どこか場所を言ってください。出掛けますから」
「いえ。うちが出掛けますよって、どこでも言うてください」
そう言ってくる涼子に、それならと、佐伯は行きつけの料理屋の名をあげた。
「わかりますか」

「へえ。よう知ってます」
たしかに知っているらしい涼子の響きを聞いて、佐伯は、受話機をおいた。
ひとりで佐伯に会ったことのない涼子が、たった今電話を入れて寄越した。——会いたいと、言う。
なんの話しがあるというのだろう、涼子の澄んだ声をおもうと、佐伯は、涼子が姉の婚約者としての自分に甘えてくるような感じさえした。
佐伯と灑子(さいこ)との婚約が決まったとき、涼子ばかりが白けた顔でいたのを、佐伯は、おぼえていた。
気がかりであった。
涼子からの電話は、佐伯のつきものを落とした。

涼子は、二階の小部屋に通っていた。
床の間の菊を見ていた。
中輪の菊は、みな同じ種類らしい黄色で、無造作とも見える投入れようだった。
壺は青磁で、あるかなしかの細い線の幾筋もの紺であった。
壺の青一色が、その上の黄菊をいっそう鮮かにしているかに見えた。
佐伯は、部屋にはいるなり、
「お待ちになりましたか」
「はい。——いいえ、うちかていま来たところです」

涼子は、居ずまいを正した。先刻の、電話の声のやわらかみは消えていた。
涼子は、はじめて姉の婚約者とふたりだけで向かい合った。
「勝手にお電話したりしておどろかはりましたやろう？——かんにんえ」
涼子の目が床の間の花に向いてゆくのを見とめると、佐伯もそれへ目をやった。
「いや。うれしかった、……。——いい菊だ。菊は、好きですか」
「へえ」
「ぼくも好きだ。花もいい、葉もいい。香ばしくて、おいしい」
「え？」
涼子は、
「うち、花、見るのが好きですねん」
「あ。そうでした。——つい食べものの方へ神経が向く」
佐伯は、照れかくしするふうでもなく、笑った。
好きか、と言ってきた佐伯の問いにすれば、観賞ばかりが答えではない、ましてここは料理屋だ。——涼子はそう思いつくと、声たてずに笑いがこみあげてきた。
固かったこころに、佐伯への親しみが湧いてきた。
佐伯に会うことの警戒心がゆるんだ。
店の女が膳を運んできた。
「酒にしました」

佐伯は盃をとって涼子の前においた。
「うち、飲めへん」
「せっかくの機会です。今晩はゆっくりしましょう」
「……」
涼子は、うなづいた。うなづく自分が、涼子はふしぎだった。
「おなじ京都の町に住んでいるのに、涼子さんと食事するのははじめてですね」
佐伯に会うときの涼子は、いつも姉と一緒の涼子であった。話しをするのも姉の灑子をとおしての涼子であった。
「きょうは、佐伯さんに聞いてほしいことがありますねん」
初対面の他人に言うふうな、言葉のぎこちなさが佐伯の心を射(さ)した。
「なんですか」
と、言いながら、佐伯は、涼子の盃に銚子をかたむけた。
「少うし、飲みましょう。飲みながらお聞きしましょう」
「――へえ」
涼子は、酒の苦(にが)みを飲み込んだ。
「佐伯さんは、ほんまにお姉さんを好いてはりますのん？」
酒の苦みが毒気になった言い方だった。
「え？」

佐伯は、テエブルの上においた眼差しを、まっすぐ涼子に向けなおした。
「なにを、言います？――いまごろ」
「ほんまに、お姉さんを好いてはりますのん？」
「好きだ。――愛のない結婚なんか、ぼくにはない」
涼子の毒が、佐伯に効いた口ぶりだった。
「なにが、言いたいんです？」
会社に電話のはいったときの、佐伯の心のなごみは消えてゆきそうだった。
「うち、お姉さんが許せへん」
「……。お姉さんが、許せない？」
「へえ」
涼子は、
「うち、お姉さんに恨まれること覚悟して出て来ましたんえ」
「覚悟？――一体なんのことなんです？」
倦怠じみた表情が顔に表われてくるのが、佐伯は、自分でわかった。欝陶しさが、佐伯に浮かんだ。
「ここの揚げものは、うまい」
「話しを、そらさんといてください。――話しを聞いてください」
「――」

「佐伯さん。お姉さんいう人、どない人かよう知ってはるんですか？」
「知ってる、つもりです」
「お姉さんと結婚しはって、しあわせになれる思ってはりますのん？」
「しあわせを願わない結婚はないでしょう」
「へえ。そらそうどす。けど、お姉さんいう人は、おおきな傷を持った人どす」
「――傷？」
「へえ。お姉さんには、好きな人がいますねん」
佐伯は、手酌した。静かに飲み込んだ。
「好きな人がおりながら、お姉さんは佐伯さん、あなたと婚約したんです」
「ぼくは、知ってますよ」
佐伯は、言った。
感情のない言いぶりだった。
「ぼくは、知っている」
繰返した。
「涼子さん。あなたは、ぼくとお姉さんとの結婚に、黒い予感をなさるんですか」
「――そおどす」
「いままでにどんなことがあったにしろ、結婚して一家を築いてゆこうという意志にくらべたら、そんなこと、小さなことです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.